

# 虚の符

洪水企画 2022.12.15

## 30

イカダ

http://www.kozui.net

### 座 平井達也

座り心地のいい便座に座っていたい。各駅停車の温かいシートに座っていたい。座りの悪い関係性みたいに座っていたい。考える人みたいに座っていたい。ほんとは何も考えてない。詩人、真面目すぎ。まあ座れ。立冬よ。立冬にこそ座れ。地球もいったん座れ。退去命令を受けた開発推進派は開発予定地に居座れ。一等地には一等の詩人、居座れ。各駅停車の温かい優先席に無人も居座れ。便座も。便器の上に居座れ。すべての座席よ。まずみずからが座れ。その過程の最初から最後までを見つめながら座っていたい。座って眠る地球の最後のときに座っていたい。私はまるで違うものの座席に座っていたい。



\*世役の現場を視察して帰った中井氏は、フロン大産額へのメモリーをこら問われて、面談へ持ちこた問んだ。

### 夕日 薫 神泉

夜も闇も知らない。ただ光に満ちたあの場合からいくつもの約束を携えて、一度きりの体温を手にしたきみ。小さな指先から、色鮮やかな真四角のおりがみから生まれ、羽ばたいてゆく。まあたらしい鶴や、水色の飛行機紡がれ開かれてゆく。きみの夢を乗せて羽あるものたちが描く柔らかな飛行曲線、追いかけるまなざしの向こうに窓から射す夕日。はじめて降り立った。きらめくこの星の土の匂いを、おだやかにこぼれ落ちる雨と頬に触れる優しい風のささやきを、忘れないで。きみのその温もりは、ひとひらの祈りに乗せた舟舟。産声を上げた瞬間から、永久につづく。吸う息、吐く息、巡りゆく人類の、まるくなだらかな背のひとつ。点滅する生の鼓動を、彗星のごとくたおやかな時の手のひらが、ほら、なでてゆく。

### 孤独の王の子 海埜今日子

虎が眠るようだった。かれというこどくを、どうしたら過こせるのだろうか。首がすこしやぶけたような痛みがつづく。葉ずれの音、虫のささやきが日々をそよごむ。たまに眩暈。黄ばんだようなまぶしさ、たぶん、それらで、「こどく」と何回もつぶやくと、琥珀がまざることがある。虫や葉の横たわる、太陽の色をした。樹液は傷をおすために流れるのだとか。かれの気配があたたまり、ともるようです。泡のような息が、最後に声だ。以前なら忘れようとしただろう。無視という声がどどく、首からにぎやかさが遠のいた。いや、音や像がめくれかえって、鳴っているのかもしれない。にぶい痛みが首かざりみために、まだ、すうつと取り巻いている。こどくこどくこどくこどくこどくこどくこどく、やっぱり琥珀だ。ちいさな気泡、そこをとおして、ひりひり、どくどく、水を飲む。しずくが虫をかやいた。日にかざす、樹液たち、かすかに甘い。葉っぱのダンスだ。虎の王さま。琥珀の「琥」が、王に虎なのは、虎が生を終ると石になったと、古代中国では考えられていたから。こどくな王だ。虫がよりそう。ともったまま、まるでセピア、かがやきと、黄ばみがまねいて、かげるから。首はやぶれたまま。けれども痛み慣れた。いった。とりまくかざりが、でこぼこして、そうして、こどくたちとすれるのだ。鈴のような虫の音、ちいさなはばたき、落葉を踏むときのやさしさ、蟬のぬげがら。琥珀の子。かれという、黄ばんだかたまりを、こんなふうにとけばよかった。生を終えた夕日が、生まれ変わって朝のぼる。甘い蜜の色に、はぐくまれた虫の息は、子のように長い眠りをやすらいでいる。

### 迷い込むものとしての野原 久野雅幸

野原に入るにはもう迷い込むしかなかった。大小の螺旋が無雑作に放り出されている。巨顔が蔓を巻き花を咲かせている。穂の出ている蓬の茎に天道虫が止まっている。螺旋階段があった。建物があった形跡さえない。思い出したよ。上ることができたはずの階段を踏み外して自分がいまここにいること。草いきれいばかりではない。伸びたゼンマイの吐息があつてむせ返る。野原の上をネジ巻きが飛んでいる。うっかりゼンマイの一部を巻き取ってしまったような舌で。ネジを巻く。あのネジ巻き。時計職人が綱を持ってネジ巻きを捕らえようとしている。今度つくる時計で。あいつは。どんな時間を刻むつもりなのだろう。ねえ、あなた。こんなふうにごわしたのはあなた自身ですよ。草の葉で切れた痛みは。ゼンマイで切れた痛みと比べれば。ないも同じだ。半ズボンで行つてはだめよ。草のねもとに小さな巻き貝の殻が無数にある。あまりに規則正しく螺旋を巻いたものたちの夢が空にのぼる。時間から放り出されて。上弦の月が。明るい南の空にかかっている。

野原から出るにはもう別の世界に飛び出すしかなかった。

### ノンフィギュラティブ燃焼の火花 たなかあきみつ

(すわ顔役が) 小皺ばかりのフィヨルドの切れ込み。銀色の残滓としての焼き魚。火事の現場で断裂するR・サビエの焼失したアトリエに。屍体は見当らず、顔面テラロッサ。それでも痛恨のブレード願望の痕跡よ。日頃まぐれに投げ込まれる。べらべらの遺品整理屋のチラシ。どて死の気配を察知したのか。雨がかりのバンクに置き去りの。神経液にびくびく運動する幅射熱。競輪選手の動体視力の摩擦熱！ (九月の雷鳴) いつも交差点を渡り終えたところで、巧みに撮影機材にレインコートを装わせ。九月の雷鳴を合図に。駅出口から傘は骨だけ。横殴りの雨と真つ向勝負をいどむ。駆けたす無謀な乗客を。数秒間のテレビ放映のため。好アングルで待ち構えるEOSの位置取りに長けた老練なカメラアイは。びくともせずもつぱら稲妻を魚籃―― (ジャミングの行方) 夜来の半島からのジャミングも。路上のレミングも尻上りの虎刈りも。その影の暴走ももつぱらミモザ作戦の光芒。音頭とゴブライストの連続技。たる(ガウチョ節)よ、 蔓も地衣も海藻類のウェットスーツも。いずれも退屈しのぎの(恐怖のオアシス)。自炊的におるプラスチックスープも。有毒なイェロウケキの刀入も。Barabagと海原をぶかぶか移動する！ (ギミックサラダをも一度)

汗みどろのキャベツの偏頭痛とて。見た目にジャンクポテトのなれの果て。だから唇の痕もピーマン曲面にぎゅう語め。肉はビューマ印のシオルダーのみ、グイッオオ！ 脳震盪なみに。びとびちはねるわい！

### 小島きみ子

(おやすみ)と二十四回言った。真夜中に(おやすみ、おはよう)と言って二六日になった。あなたは(おやすみ、おはよう)と一回言っただけだった。坂道を下りて上って、振り返る。(わたしのなかのあなた)を。夏のアルバムを捲ると、あなたへの愛は届かなかった。あなたからの愛は届かなかった。

やがて、立冬の雨が去り、冷たい風が堤防の土手のチガヤの穂を月の光の射す方へと照らしていたのだが、あなたの手紙への返信は(風が眩しすぎてなにも聞こえなかった)と書くべきだった？自然は冬の寡黙なときもあかるい春の芽吹きるときも紅葉のときはことさらに人が人の形で生きていることの哀れな残酷さを感じ知るべきで草は草のいのちの為だけに枯れて種を飛ばす。木は木のいのちの為に樹液を調節する。果実を分配するのは人間に操縦された自然の術で本物の野生は人間の為の分配などしない。人知れず人に悟られず無意味な意味の空無な時間にのめり込んでいると人声は途絶えて人の形が溶け出している。路地から路地を歩き公園から公園を迷い、形を失くした生き物の抜け殻を拾い束ねて、背負って、部屋に帰つてくるとメタモルフォーゼした姿形が三面鏡に右と左と正面が異なる人間の姿が実に朗らかに現れている。流動体であり連結されたGlobeでありそれを冬の露微に混ぜて植物の意識の姿容というものを白磁の花瓶に投げ入れた。植物はデリケートな知性を持ちながら、環境に対して頑強な力があり、見えなかった言語の文体であるかのように、空間に現れたあなたからの愛は、(風が眩しすぎてなにも聞こえなかった)のだ。



### 白い蛇 池田 康

白い蛇の走る朝。はこぶ白い時間は神聖。ひたすらまっすぐ走る神聖な曲線。鳥は白い蛇に追いつけない。馬も白い蛇に追いつけない。魂は白い蛇に近づかない。異次元へと飛翔する計画を小さな頭にかくし。魔術かなにかに憑かれて走っている。 白い蛇の走る昼。はこぶ白い時間は高く売れる。時間を更新すれば空間は変形し。世界は梅干のように小さくなる。白い蛇は世界を食べない。蛙も鼠も食べない。もつぱら人間を食う。という噂。白い蛇はその真実をはこぶ。とくろを巻きその嘘を消化する。 白い蛇の走る夕。はこぶ白い時間は虚無。死という白い夢をつぎぬけて走る。白い蛇はなにを知るか。なににも知らない。走る。ことし知らない。なににも知らない存在は神ではない。にせの神の使。かたくなな迷信が文明の夜を走る。